

## 【IEEE-VR2001 大会報告】



## IEEE-VR2001 大会報告

## ◆総括

## 館 暲

IEEE-VR2001 組織委員長 (東京大学)

IEEE-VR(IEEE Virtual Reality) は、1993年9月に始まったIEEE (The Institute of Electrical and Electronics Engineers Inc. : 米国電気電子工学会) のComputer Society (コンピュータ学会) が主催するバーチャルリアリティの分野に於いて世界で最も権威があるとされている国際会議であり、98年までは、VRAIS (Virtual Reality Annual International Symposium) と呼ばれていたシンポジウムが99年からコンファレンスに格上げされた国際研究集会であって、バーチャルリアリティ分野における最高水準の会議と自他ともに認められている。

このような晴れあるバーチャルリアリティ国際会議の米国以外の海外での初めての開催、しかもそれが21世紀の初頭を飾る日本での開催という願ってもない出来事となったなか、2001年3月13日から17日、横浜国際平和会議場 (パシフィコ横浜) 会議センターで国内組織委員会を中心として執り行なわれた。参加者は、本会議、チュートリアル、ワークショップをあわせて世界23カ国、493人にのぼり、しかも外国からの参加者が55パーセントをこえ、さらに日本に滞在する外国の研究者、学生も含めると、6割近くが外国からの参加者という日本で行う国際会議としては珍しいほどの海外参加率を得て、会場の雰囲気はまさに国際会議一色につつまれた。研究論文も採択率が30パーセントという大変な難関を通過した文字通り珠玉の論文ぞろいであった。招待講演には、ゲーム、医学応用について、今後のVR実用化の中心となると予想されるメンタルヘルスケア分野でのVRについて、この分野の創始者であるジョージア工科大学のホッジ教授に講演いただき、また、特別講演として、日本伝統の芸術であり一種のバーチャルリアリティともいえる「能」について梅若猶彦博士にオリジナルの創作能の実演も含めお話を

いただき、両者あわせて洋の東西にわたるバーチャルリアリティの奥深い世界を心から堪能することができた。これまでの会議の大会長などを含め内外の多くの方々から賛辞や賞賛をいただき、2002年がやりにくくなったなどというお世辞は割り引いて判断しても、日本バーチャルリアリティ学会が中心として培ってきた日本のバーチャルリアリティのポテンシャルを理解していただいたという意味からは大成功であったといっても過言ではないのではと思っている。

日本では、ICAT (International Conference on Artificial Reality and Telexistence) という国際会議を1991年から開催しており、1997年の第7回からVR学会の主催となっている。このICATを創めたのは、「人工現実感とテレプレゼンスタンス」研究会であり、その委員長として、また1996年から創設された「日本VR学会」の会長として、日本における20年にわたるVR研究の歴史の流れの中で、アメリカ生まれのIEEEの国際会議を我が国で主催することにより、日本のVR研究を世界に知ってもらうとともに、日本の方には世界のVRの迫力を直に感じてもらえればと思い続けてきた。実際、日本VR学会の設立の時から、VRAISを日本で開催することが大きな目標の一つとして掲げられていたのである。

しかし、その道は必ずしも平坦ではなかった。というのも、VRAISはIEEEのなかでもNeural Networks Councilが始めた会議で、1993年の同じ年にComputer SocietyがVirtual RealityとVisualizationの国際会議を開催するなかで、同じ性格の会議がIEEEに二つあってもということから、両者で1年ごとに行うことで話し合いがなされSteering Committeeが結成され、交代で会議を主催されていたという経緯があったからである。我々は、コンタクト先を、それまでの縁からNeural Networks Councilとしていたのであるが、実は、Computer Societyのほうが会議に熱心であり、しかも会員も多く所掌分野としても適切であることから、会議の運営が実質上Computer Societyに完全に移行していたのであった。我々のことを良く知っているNeural

Networks Councilは、1999年に日本で開催という提案を受け入れてくれてSteering Committeeに提案したのではあるが発言力は無いに等しく、Computer Society側は猛反対し急遽ヒューストン開催を主張したのであった。つまり、日本などにまかせられない。どうしてもやりたいならば、日本とアメリカ両方で年2回行えばよい。何か何でもテキサス3月開催は強行するといった考えに固まっているようであった。一方、日本開催はVR学会の悲願ともいえ、理事会としては会長の私に全権を託して、何とか単独開催の交渉をアトランタで行ってほしいという意思が強い。

そのような中、1998年3月、次回の開催地が決定しないという前代未聞の状況のなか、アトランタでのVRAISは始まろうとしていた。その前々前日、そして前々日と前日、ホテルにおいて私が単騎、先方から代わる代わる呼び出され、そのつど有力者たちに囲まれながら白熱の議論を闘わせることになった。険悪な雰囲気の中始まったこの三日にわたる話し合いではあったが、不思議なことに、辛抱強く語り合い、説明していくうちに、コンピュータ学会側の重鎮たちも氷解し、次第に話が通じるようになっていった。まことに不可思議な経験であった。しかも、現実、最後には完全に意気投合し、国際会議をIEEEコンピュータ学会のコンファレンスに格上げし、今後飛躍的に発展させるべく会議名を変更するとともに一年一会議開催の原則も共同で樹立、また今後の開催スケジュールをこの時点で2001年まで決定し、2001年には日本VR学会とIEEEコンピュータ学会が主催し、日本で開催するという解決案に達したのであった。そしてVRAIS当日の朝一番の開会式で、そのことが大会長から告げられた。まさに感激の一瞬であった。

それから3年、日本開催を決めて本当によかったと当時のコンピュータ学会の重鎮たちがしみじみと語ってくれた。3年にわたる組織委員会の苦労はここに報いられたのである。



## ◆プログラム担当

### 廣瀬通孝

東京大学

IEEE VR 2001に対しては、110件の論文が投稿された。内訳としては40件が日本、30件が北米、30件が欧州、10件がアジアという構成であった。プログラム委員会は128名のVR分野の専門家から構成されるが、これらの論文に対して1件あたり5名が担当となって、査読を行なった。査読者の選定にあたっては、5名がすべて同一の地域に属さないようにすること、著者と同じ組織に所属する人間は査読者に入らないようにすること、など、査読の公平性が保たれるよう留意した。また査読者の専門性を重視し、査読者があらかじめ届出たキーワードと論文のキーワードとのマッチングにより査読者の割り振りを行なったが、この際、プログラム委員の1人である東京都立科学技術大学の池井寧氏のプログラムが大活躍したことを記しておく。

査読の結果、33件が論文として、12件がポスターとして選択された。論文採択率は30%であり、多分過去最少の数字となったが、これは発表をシングルセッションに収めるための制約であり、他の多くの優秀な論文を排除せねばならなかったのは残念であった。ただ、それだけに論文のクオリティは、かなり高いものになったと確信している。また、論文賞の審査にあたっては、プログラム委員長の1人であるRosenblum博士が委員会を構成し、賞の選定を行なった。

他に基調講演者として、ジョージア工科大学のLarry Hodges教授、特別講演者として、能楽者の梅若猶彦氏にお願いし、両氏とも大変有意義な講演をしていただいた。何人もの海外の参加者からプログラムの構成について、お褒めの言葉を頂いたことをこの機会に記し、プログラム委員諸氏への感謝の言葉としたい。



ポスター論文